まとめ

６０万年と言われる長い歴史の中で、人類は、３万年ほど前に、創造的な造形物を残した。原始の民は、ヨーロッパ半島のアルタミラやラスコーに、呪術的な意図からか、生活の祈りからか、喜びに根ざした遊び心からか、素晴らしい動物の図像の数々を洞窟の壁に残した。彼らが手にして描画した絵具は、どの様な材料だったのだろうか。それらは、主に灰や、動物の骨粉や、岩の粉末（注１）であったということが云われている。人類は、平面画と呼ばれる美術を、粉末の絵具から始めたのは、間違いないことと思われる。

現代の造形用具として、粉末絵具＝パステルこそ、原初からの正当な後継者と思われる。身体の延長としての指先と材料が直接に触れ合い、共鳴共動する芸術の媒体である。このように、単純にしてプリミティヴで、自然に内在する本質に基づくものが、真に人類の心に直接結び付き、芸術となるのであると思われる。

現代では、大衆社会、情報化社会の中で、昔の王侯貴族やブルジョア市民に勝るとも劣らない美術への知見を、大衆は備えている。大衆が芸術を趣味のレベルで楽しんでいる時代である。

単なる趣味の次元を超えて、気高い何ものかを追求する営みにより、真実の芸術は生まれるにしても、そのことに違いはないのであるが、一方では、芸術となるには、大衆に近い存在であることが重要であると思われる。

美術の世界では、絵画材料の一つとしてパステル絵具は、ヨーロッパの歴史の中で、生活に身近な存在として、古くは王侯貴族やブルジョア市民に、近くは一般大衆にも、親しまれて来たと云える。

以上の見通しを持って本論において、学問として絵画を論ずる対象に、絵具としてのパステルを取り上げた。パステル絵具に内在する、油絵など他の絵具にはない特性を論じた。

パステル絵具は、輝かしい色彩と即応性、軽便性、即物性のあるプリミティヴな絵具であり、芸術作品を目指した大作の造形にも、趣味としての大衆のささやかな楽しみのためにも、拡張性のある最適の描画材料であると云う結論になったと思われる。加えて、ルドンのパステル画花瓶の花束は、パステル絵具の持つ画材としての特性の証明であったと云える。

ルドンは、音楽にも造詣が深く、芸術の真骨頂は暗示にあり、その最大の具現者は、音楽にあるとも述べている。（注２）ロマン主義の芸術思想では、「音楽は、目に見えるものにつながれている他のすべての芸術を凌駕した最高の芸術であり、目に見えない世界が、音楽そのものの中に深く敬虔に啓示される。」（注３）

この言葉は、ルドンの絵画および芸術に対する考えを、端的に表現していると思われる。

ルドンの云うところの目に見えない世界は、視覚情報が優先されて行く現代社会への、警鐘であるかもしれないとの思いを抱きながらも、音楽と美術についての探求は、次の機会に譲りたいと考える。

最後に、卒業研究の履修に際して、筆者の初めての慣れない論文作成に、根気よくご指導いただいた、青山昌文教授、金山弘昌講師の両教官には、感謝の気持ちでいっぱいである。また、ルドンの情報収集にご協力いただいた岐阜県美術館学芸員の山本敦子氏に感謝の言葉をのべて、筆を置くことにする。

まとめ　注記

（注１）「原料を砕いて粉にし、石片の上で練り固めてチョークを作ったのであろう。（…）結合材として、洞窟内の炭酸カルシウムを含んだ水で練り固めていたことが判った。」
横山祐之著、『芸術の起源を探る』（朝日新聞社、1992）pp.37-38 。
フランス文化情報省のサイトに、石片の映像がある。
'Les materiaux colorants, se presentaient sous forme de poudre ou de petits blocs,'　"Le ministere de la culture et de la communication,";
'http://www.culture.gouv.fr/culture/arcnat/lascaux/fr/ '

（注２）「暗示的な芸術とは、事物の夢への放射のごときものであり、思考もまたそこへ向かうのです。（…）こうした暗示的芸術は、そっくりそのまま音楽という喚起的な芸術のなかに、より自由に、輝かしく存在します。」
ルドン、O.著、「芸術家の打明け話」（バクー、R.著、本江邦夫訳、『オディロン・ルドン、パステル画』1988、 pp.60-61 ）
"L'art suggestif est comme une irradiation des choses pour le reve ou s'achemine aussi la pensee.　（…）Cet art suggestif est tout entier dans l'art excitateur de la musique, plus librement, radieusement;　（…）"
Redon, O., "Confidences d'artiste," *A soi-meme.* (Jose Corti, 2000,) p.26.

（注３）三浦信一郎著、「芸術諸学の分立としての音楽学の成立」（当津武彦編、『美の変貌』（世界思想社、1992）p.229。